飼い主の老人ホーム入所にあたって動物愛護推進員と連携したケース

～飼い主・猫・関わった支援者みんながハッピーな結末～

🌕新美　育子（地域包括支援センター青戸　社会福祉士）東京都

**Ⅰ．実践の概要**

福祉関係者と動物愛護推進員がうまく連携できた事例。

一人暮らしの高齢者が認知症の進行とともに自宅で暮らすことが難しくなった。高齢者は猫を1匹飼っていて、猫は自宅の中と外を自由に行き来するスタイル。ペットも入居可の有料老人ホームに高齢者と一緒に入居することになったが入居日に猫が逃げてしまった。福祉関係者だけでは捕獲が難しかったため、動物愛護推進員に協力を依頼。福祉支援者も捕獲のために連携して、飼い猫は無事に高齢者の待つ老人ホームに行くことができた。

**Ⅱ．倫理的配慮**

個人情報保護のため、事例の主旨に影響を与えない範囲で事例の一部を改変した。

**Ⅲ．実践内容**

一人暮らしの高齢者は度々通帳を無くしてお金が下ろせず、長期に入浴せず、自宅内はゴミ屋敷状態で、近所の人から地域包括に相談が入った。女性は猫を1匹飼っていて、猫は自宅内外を行き来していた。

地域包括職員が病院への受診同行をして介護保険の申請や認知症の診断につなぎ、ケアマネジャーを依頼してヘルパーやデイサービス、配食サービス等につないでもらう。唯一の身寄りである姪は高齢者のお金を狙っているそぶりがあり、福祉関係者で話し合って成年後見人をつけるために動く。

その間も認知症は進行していき、「お金がない」との強い思い込みから不安感から頻回に近隣住民に助けを求めたり、促さないと食事を摂らなくなってしまったりするなど一人暮らしは難しい状況となった。成年後見人も決まり、猫と一緒に過ごしたいという女性の希望に沿って、ペットと一緒に入居できる有料老人ホームに入ることになった。

ところが、猫と一緒に入所するため老人ホームの車が迎えにきた時に猫が逃げてしまった。ケアマネジャーやヘルパー、地域包括職員が連携して捕獲を試みたが、猫が近寄らないためうまくいかず。動物支援関係者に力を借りるしかないと考えて、保健所を通じて動物愛護推進員を紹介してもらった。

　動物愛護推進員、ケアマネジャー、ヘルパー、地域包括職員が高齢者宅に集まり作戦会議を開く。動物愛護推進員が高齢者宅に捕獲器をしかけてくれて、福祉関係者が交代で訪問して捕獲器の確認や再度エサをしかけるなどの対応を行った。

　しかし、1週間経っても捕獲できなかった。動物愛護推進員は福祉関係者の動きとは別に連日高齢者宅に通って、猫を少しずつ慣れさせていき捕獲に成功。2週間遅れで猫も無事に老人ホームに入所。その後、高齢者も猫もすっかり老人ホームの生活に慣れて、老人ホームから届いた“ふたり”が幸せそうに寄り添っている写真を見て、動物愛護推進員ともども喜びを共有できた。

**Ⅳ．考察・結論**

福祉関係者も動物愛護推進員も全員が気持ちよく連携できた事例だった。その理由しては、動物関係の困りごとが起こってもまずは福祉関係者で動いてみたこと、動物支援関係者に協力を依頼しても丸投げせずにそれぞれができることを積極的に行ったこと、飼い主の思いやその背景についても動物支援関係者と共有することで同じ目標に向かえたこと、その後どうなったのかを動物支援関係者にも共有したことなどが考えられる。また、福祉関係者間に強い信頼関係の土台を築けていたことも大きかったと思われる。

**引用（参考）文献：**なし